

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



京藤 敏達さん
(筑波大学教授) ... P 2

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に みんなで 備える！ 利根川下流 を守る



首藤 克哉さん
(銚子地方気象台
防災業務課 調査官) ... P 8

6月1日～10月31日までの5ヶ月間は、いわゆる「出水期(しゅっすいき)」。
大雨・台風の多いシーズンです。

東日本大震災により、利根川下流域では液状化現象などが多く発生、
昨年の出水期は心配されましたが、震災で被災した箇所を修復する本格
復旧工事は、この5月に完了する予定です。

しかし、だからといって安心というわけではありません。また巡ってくる
大雨・台風シーズンに備えて、大震災の教訓でもある「自助」「共助」を
よりいっそう意識し、強化する必要があります。

「自助」「共助」「公助」にはそれぞれ、どうしても限界があります。しかし、
連携しあうことで、3つの「助」はより高い効果を発揮します。

そのために私たちは何に注意し、意識すれば良いのでしょうか。



植竹 勇さん
(龍ヶ崎市高須町在住/
龍ヶ崎市 総務部 危機管理室長) ... P 11



南青山自治会防災会(我孫子市) ... P 6

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



これからの防災のカギは、 自助・共助・公助の連携。

京藤 敏達 (きょうとう はるみち) さん (筑波大学教授)



京藤先生は、利根川下流河川事務所のリバーカウンセラー(※1)として、昨年の東日本大震災後、利根川下流をはじめとする堤防を視察しています。応急復旧工事に続き、本格復旧工事がこの5月に完了する予定ですが、視察の結果をふまえて「まだまだ注意が必要」と警鐘を鳴らします。

※1:国土交通省では、全国の一級河川を対象として、それぞれの川にくわしい学識経験者に河川管理の改善のためのアドバイスを受けています。そのアドバイザーの方を「リバーカウンセラー」といいます。

堤防の中身がどうなっているのか、わからない

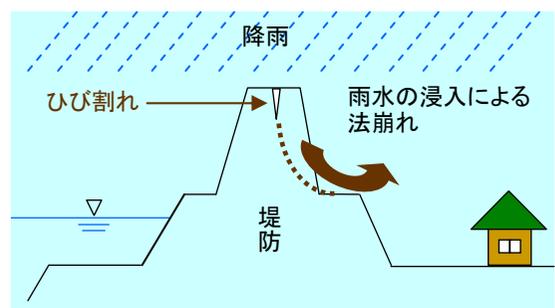
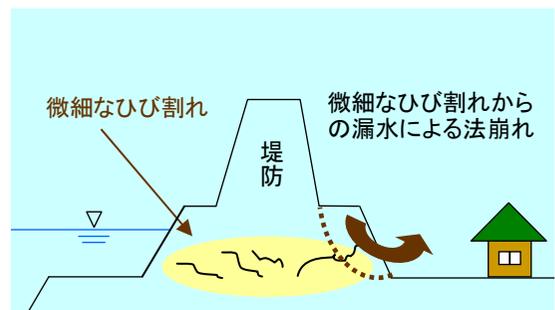
昨年の東日本大震災後、利根川、小貝川、霞ヶ浦の堤防を視察しました。

堤防の外観から分かる被災状況の大きさ、たとえば堤防のてっぺんの天端(てんば)が低くなっている、堤体に亀裂が入っている、基礎のまわりで砂が噴き出している、樋管と堤防の境目の亀裂や陥没などが発生していることなどに、とても驚かされました。

同時に堤防の中身がどうなっているのかが分からないことに、大きな不安を覚えています。

堤防の中身に亀裂などがないか確認するためには、土を削ってみるしかないのですが、利根川の長い堤防全てをそうやって確認することは、とうてい無理なことです。言葉を換えて言うと、実際に洪水にならない限り、堤防の中身がどうなっているか分からないということになります。

震災の発生が昨年の3月。同じ年の6月にはいわゆる「出水期」—大雨や台風の多いシーズン—に入るため、まずは応急的な復旧工事で堤防の高さの回復などが行われました。その後、出水期が終わった11月以降に、液状化防止対策などを含む本格的な復旧が行われ、5月中に完了する予定ですが、堤防の中の状態を正確に把握できない以上、出水期は特に注意が必要です。



今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



利根川流域の地質や堤防の特徴

利根川は、もともと東京湾に注いで流れていたのをご存じでしたか。それを江戸時代に、銚子で太平洋に注ぐよう付け替えたという歴史があります。利根川の下流域は沖積平野(※2)で、砂層も多い。さらに、流路を変えたあと、改修工事を重ねて、川を直線化するに伴い堤防もまっすぐにしました。つまり、かつて川だったところに、重量のある長い連続堤防をつくっているのです。そうした場所では、水がしみこんだ砂の層が厚くなっているため、特に液状化しやすいと考えられます。

昨年の震災で、利根川下流域でも液状化現象が多く見られましたが、そうしたことが原因と考えられます。また、この時の震度は、これほどの液状化が起きるほどではなかったはずなのですが、継続時間が長かったことも、その一因だったと聞いています。

※2: 川が運んできた土砂などが積もってできた平野。水分を多く含むので、軟弱地盤が広く分布し、水害の危険性が高いという特徴がある。



約1000年前



現在

ハードとソフトのあるべき連携

川の水位がそれほど高くなくても、堤防に亀裂などがあると、そこから漏水などが発生して、最悪の場合決壊の原因になることがあります。復旧したとはいえ、昨年の震災で堤防の内部に亀裂や空洞などの被害が残っている可能性はありますし、余震などによってこれらの被害が拡大していることも考えられます。これまで経験したことのない事態が起こる可能性が高くなっているということです。

ですから、出水による被害を防ぐには、ハード面だけでは対処できません。そこで、川を見回ることが、今後きわめて重要になっています。

国土交通省利根川下流河川事務所では、ソフト対策として、「水防団待機水位(※3)」「はん濫注意水位(※4)」を引き下げること、被災の大きかった箇所を新たに「重要水防箇所(※5)」として新たに指定しています。

※3: 水防団やその川の管理者が、川を見回る準備をする目安となる水位

※4: 水防団やその川の管理者が出動し、自治体が避難準備などの情報の発令を判断する目安となる水位。はん濫に関する情報への注意が必要。

※5: 堤防が低い、過去に斜面が崩れたことがある、漏水したことがある、むかし川が流れていたなど、洪水の時に危険が予想される特徴を持ち、重点的に見回り・点検が必要な箇所のこと。



今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



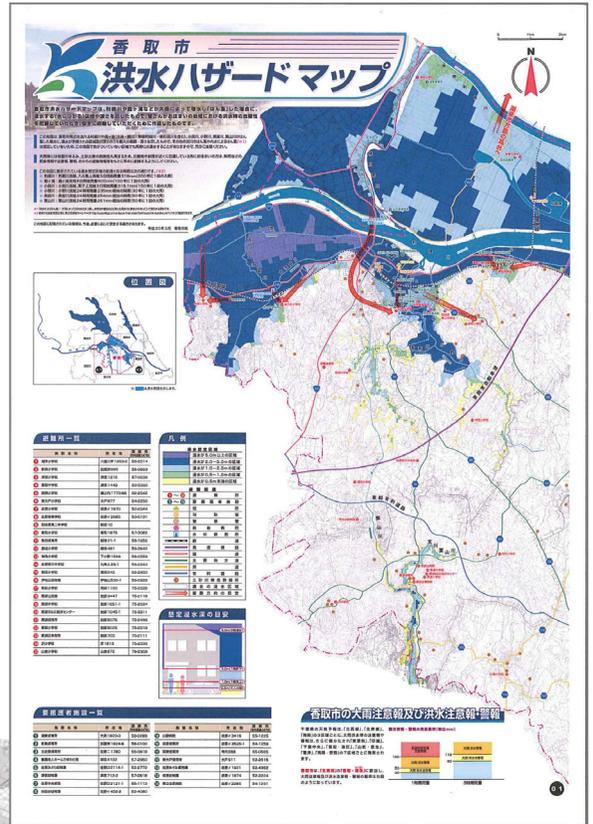
「自助」「共助」「公助」の連携が、これから極めて重要になる

ただ、利根川下流事務所にしても職員数は90人ほどです。千葉県銚子市から茨城県取手市までの下流部だけでも約80kmある利根川の堤防を、きめ細かく見て回るには人手が足りません。ですから、水防団や地域住民のみなさんにも川を見ていただきたいと思います。

みなさんで川を見ていただくことで、漏水などの異常を早期に発見して対策できるようになり、堤防を守る、ひいては地域を守ることになります。ですから、堤防近くにお住まいの方は、いつもより川のことを気にかけてもらって、堤防から水が流れているといった異常を発見した時は、すぐ河川事務所や水防団などへ連絡して下さい。

堤防から離れている人は、事前に洪水ハザードマップや浸水想定区域図を見て下さい。川からちょっと離れていると安全だと思ってしまうがちですが、実際は、離れていても堤防が壊れれば、浸水します。自分の家が浸水想定区域に入っているかどうか、予め見ておいて下さい。

お住まいの自治体の
洪水ハザードマップを
確認してください



利根川下流の浸水想定区域図。
利根川下流河川事務所のホームページでは、自治体ごとに拡大した浸水想定区域図も見られます

お住まいの自治体の洪水ハザードマップを調べたい時は→
国土交通省ハザードマップポータルサイト <http://disaportal.gsi.go.jp/>

出水期の余震は、さらに危険

震災から1年経ったから、本格復旧工事が終わったからとって、安心はしないで下さい。復旧工事は完了しましたが、堤防の中身に亀裂やゆるみが残っている可能性があります。しかも、現在でも余震が続いています。6月に雨で堤防が濡れると、土の強度は落ちます。そこへ余震があると、さらに危険性が高まります。「出水期に余震があったら、さらに危険」ということを認識して下さい。

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



利根川下流域にお住まいの方はじめ、 みなさんに気をつけてほしいこと



ここで紹介した

「自助」=ふだんから堤防や川に気をつける、
「共助」=いざという時にはみんなで協力しあう
「公助」=出水に関して正確な情報を提供する
ということは、安全・安心に生きていくために必要なことです。

人がいるからこそ「安心」が得られます。「安全」も一人では得られません。人は一人では生きていけませんからね。コミュニケーションを取ることでできること、可能性はぐっと広がります。

僕の大学の学生でも、友達とコミュニケーションをよく取っている学生は、成績が悪くても、やがて追いつきますね。教えてもらったり、聞いたりすることでできるようになるのです。「共助」も同じではないでしょうか。

自分ひとりでやれること、みんなでやれること、国全体でやれること、これを連携して回すことが、これから大事になっていきます。自分の身を自分で守るためにどうしたらいいか考え、地域で助け合うことで、「公助」の限界をカバーし、お互いに安心と安全な生活を送ろうではありませんか。

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



地域で 「共助」を育てていくことが大切。

南青山自治会防災会 (みなみあおやまじちかいぼうさいかい) (我孫子市)

我孫子市の南青山地区は、利根川に近く、堤防が決壊して浸水したら5m以上の水深が想定されています。また液状化も心配されているところです。そこで、南青山自治会防災会をたずね、活動のようすや、「共助」の意識の一層の向上のためにどのような活動を展開されているのかをお聞きしました。

平成18(2006)年に発足して以来、地域の防災意識、「共助」の一層の向上を目指し、様々な防災活動や啓発等を行っています。毎年秋には、避難所となっている小学校を会場として、近隣の5つの自治会と合同で防災訓練を実施しています。このように5つもの自治体との合同の訓練は、市内でも画期的なもの聞いています。内容としては、「マグニチュード7の茨城県南部地震により全市で被害が発生」の想定のもと、安否確認・避難訓練、情報収集・伝達訓練、AED講習などを実施しています。

防災訓練のようす



AED講習

●防災訓練内容

マグニチュード7規模の茨城県南部地震(※1)が発生し、天王台北地区全域に住家、道路、ライフラインなどに大きな被害が発生した状況を想定し、避難方法や避難者、被害状況等の情報収集、炊き出し訓練などの住民自らができること(自助・共助)、災害時に役立つ知識を学ぶ訓練とする。

※1: 茨城県南部地震: 我孫子市地域防災計画上で想定している地震

1) 安否確認・避難訓練

各自治会が住民の安否確認や家屋や道路などの被害状況等の情報収集を行い、安全確保しながら指定された一時避難所(第三小学校)に避難する。

2) 情報収集・伝達訓練

天王台北地区の被害状況を把握し、情報を的確に伝える。

3) AED講習

自動体外式除細動器の使い方を覚える。

4) 三角巾講習

負傷者などの搬送方法を学ぶ。

5) 身近な物を使った搬送訓練

負傷者などの搬送方法を学ぶ。



三角巾講習

→次のページに続く

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



6) 炊き出し訓練

避難者に対する炊き出しや、アルファ米(※2)の配付方法を学ぶ。

7) 煙体験

火災時に発生する煙、煙の中での避難方法を学ぶ。

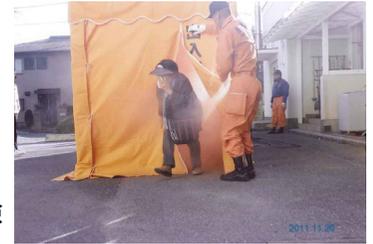
8) 避難所設営訓練

簡易に設置できる仮設トイレの組立方法や避難所で使用する間仕切りの設置方法を学ぶ。

9) 初期消火訓練

消火器の操作方法を学ぶ。

※2 米を炊いた後に一定の処理をして乾燥させたもの。
最近では、防災用品として販売されている。



煙体験

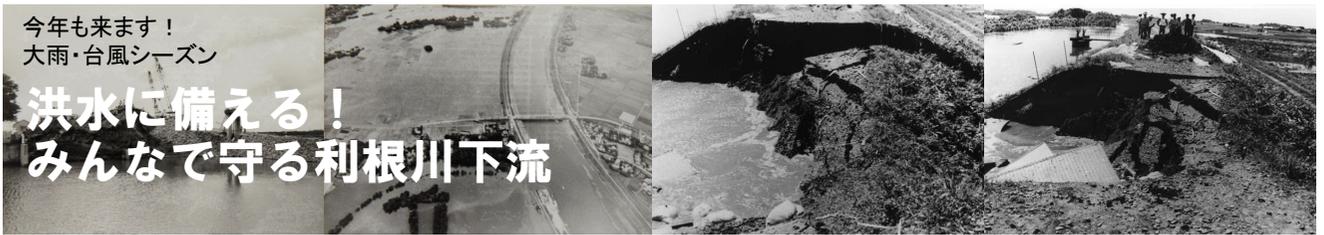


初期消火訓練

また、自治会・防災会の活動として、防災訓練の講習への参加のほか月に1回、施設の不備などを見て回るパトロールを行っています。

南青山地区は約450世帯。市内は高齢化が進んでいるのに対し、サラリーマンや共働きの若い世帯が多い新興住宅街という特徴があります。仕事や生活に忙しい方が多く、なかなか地域の防災活動に参加したくてもできない状況が悩みですが、夏のお祭りなどの行事を通じて、広がりつつあるところです。

これを励みに今後も地道に活動を続け、有事の際にお互いに助け合える地域をつくっていききたいと思います。



警報や注意報は、 「危険」を知らせるサイン。

首藤 克哉(しゅとう かつや)さん(銚子地方気象台 防災業務課 調査官)



洪水被害から自分の身を守るためには、気象情報のチェックも重要です。千葉県の気象情報を発表している銚子地方気象台防災業務課の首藤さんに、「自助」の一環として、気象情報を入手することの重要性、また、事前に洪水を察知できるお天気のサインなどについてお聞きしました。

大川・利根川も氾濫しないとは限らない？

利根川は、昭和22(1947)年にカスリーン台風によって大きな被害がありましたが、それ以降は改修工事もしていますし、カスリーン台風のような大きな氾濫はありません。でも、もし今年の台風第12号で紀伊半島に降ったような1000mmを超える雨が利根川流域に降った場合には、大きな災害の起こるおそれが十分にあります。

近年頻発している局地的大雨は、中小河川で特に注意が必要になります。平成20(2008)年、神戸市の都賀川が増水して、河川内の公園で遊んでいた子どもたちが流されたことがありますが、あの時は10分で約1m30cmも水位が上がるといふ急激なものでした。中小河川では、下流で天気が良くても上流で降った雨で急に増水することがありますから、十分注意する必要があります。



カスリーン台風による決壊状況

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



警報、注意報を聞いたら、 「自分は危険なところにいる」と認識を

洪水がもたらす被害を最小限に抑えるためにも、気象庁から発表する警報・注意報には敏感になってほしいと思います。出水期は特にそうですね。

「normalcy bias (ノーマルシー・バイアス)」「正常化の偏見」という言葉を聞いたことはありませんか。これは、「自分だけは大丈夫」「自分には起こらない」という心理があって、危険が目の前に迫らないと行動を起こさない状態のことをいうのですが、洪水に関してもそれが当てはまるのではないのでしょうか。

警報を知っても他人事のように受け取り、危険を認識しない。避難勧告を聞いても逃げない人がいるのも、そのひとつだと思います。

例え注意報でも、「あなたは危険なところにいるんですよ」という情報を発信しているんです。注意報と聞くと、それほど危機感を感じない方もいるかもしれませんが、これはまさに注意を喚起するという意味があって、「何かしら注意が必要」ということを伝えているものなんです。

そうした意味を理解して、つねに正確で新しい気象情報を入手していただきたいと思っています。

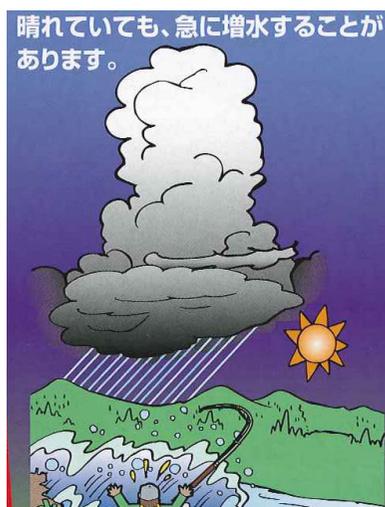
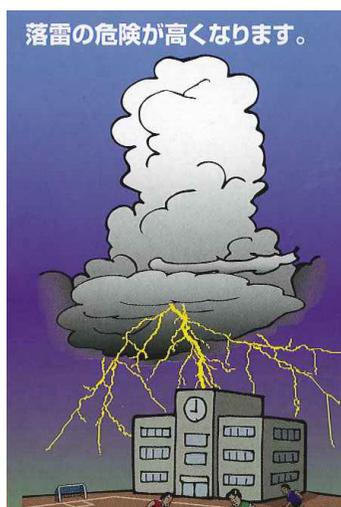


こんな天気の際は注意を

正確な気象情報を入手するには、天気予報を見ていただくのが一番です。今はスマートフォンなども普及して、いつでもどこでも気象情報を入手できますので、ぜひ有効に活用していただきたいと思います。

なお、天気予報で、「大気の状態が不安定」というのをよく聞くとありますが、これは、上空に冷たい空気、地面付近に温かく湿った空気がある状態のこと。湿った空気が上昇すると、積乱雲が発達しやすくなり、局地的な大雨や竜巻、雷などが発生するおそれがあります。

また、真っ黒な雲が近づいてきたり、ヒヤッとした涼しい風が吹き始めたら、雨が迫っているというサインです。すぐに水辺から離れ、地下などには行かないなどの対策を取って下さい。





今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流

判断に迷ったら 气象台へお問い合わせを

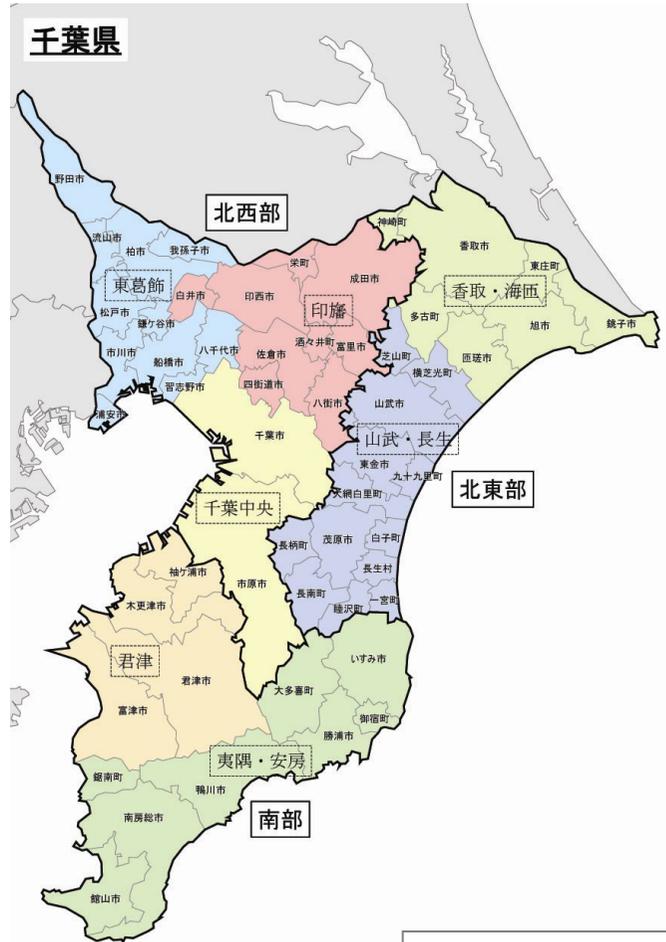
气象台では警報、注意報を出していますが、自助の観点でいうと、自ら危険と判断して逃げる、避難するというのが本来あるべき姿だと思います。その意味で、气象台が発表する気象情報を有効に活用してほしいと思います。

とはいえ、情報の内容がわからないということであれば、气象台にお問い合わせください。24時間、休みなく対応しています。

また、大雨洪水警報が出たら川を見に行かないで、というのも、この場を借りてお知らせしたいですね。大丈夫と思っていても川に落ちたり、流されたりする可能性があり、命を危険にさらす行為です。

それからちょっとした知識として、警報や注意報の発表区域を知っておくとよいと思います。気象情報はテレビやラジオから入手するという方が多いと思いますが、メディアによっては地域名で言ったり市町村名で言ったりしますから、思い違いをしないためにも有効です。

千葉県発表区域



平成22年3月24日現在

普段から気象情報を入手する習慣を

洪水に限らないことですが、自助の防災対策のひとつとして、気象情報を普段から入手する習慣を身につけてほしいと思います。普段から見れば、警報や注意報の内容を聞いていても、「前に言っていたのと違う」というのが分かります。初めてでは危険度が理解できないと思いますが、いつも見ていればだんだん理解できるようになります。その意味で習慣にしてほしいですね。

また、気象庁や气象台のホームページでもくわしい気象情報を提供していますので、こちらもぜひ見てほしいと思います。

気象情報をチェックすることも重要な「自助」のひとつ。テレビやラジオの気象情報を特に注意して聞いていただければと思います。

●気象庁のHP

<http://www.jma.go.jp/>

インタビューに協力して下さった
銚子地方气象台のみなさん。

左から首藤さん、町井さん(技術課長)、
三平さん(水害対策気象官)、佐々木さん(防災業務課長)



今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！
みんなで守る利根川下流



体験で実感、 被災直後は自助。

植竹 勇 (うえたけ いさむ) さん

(龍ヶ崎市高須町在住／龍ヶ崎市役所 総務部 危機管理室長)



植竹さんは龍ヶ崎市高須地区在住で、昭和56(1981)年の小貝川の決壊による洪水を体験しています。小貝川は、江戸時代から洪水を繰り返し、1742年(寛保2年)以降の堤防決壊による洪水は14回(決壊箇所数18)という記録も残されている「あばれ川」。昭和に入ってから、10(1935)年、25(1950)年にも決壊し、大きな被害をもたらしました。そうした土地に生まれ育った植竹さんは決壊の時、どのように行動したのでしょうか。体験者でなければ語れない、貴重なお話をうかがいました。



昭和56年の小貝川決壊のようす

堤防が切れるとは、夢にも思わなかった

小貝川の決壊で被災したのは、昭和56(1981)年8月24日のことです。まさか切れるとは、夢にも思いませんでした。

堤防が切れたのが、夜中の2時15分。当時は防災無線がなく、消防自動車からのサイレンが鳴り、「堤防が決壊しました、大至急避難して下さい」というアナウンスが流れて、初めて決壊を知ったんです。

私は当時25歳。両親と3人、家で寝ていました。切れたのは高須橋の上流200mだったんですが、アナウンスではどこが切れたのか、どれくらいの水で、どれくらいの水がくるのかまったくわからず、どうしたら良いかわかりませんでした。

小貝川は、昭和10(1935)年にも決壊しています。父は当時4歳で、その時の記憶はさほどなかったんですが、「昼を上げなくてはダメだろう、とにかく2階へ物を上げよう」と家族に提案したのです。



植竹さんが所蔵する、当時の決壊のようすを撮影した写真。高須橋の上流で堤防が切れ、町に流れ込んでいる

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



電気屋さんが駆けつけてくれて、感じた「絆」

堤防が切れたことを知って、実際に作業を始めたのが10～15分後、それから朝の5時半か6時までかかりました。

その時に「絆」を感じたのが、電気屋さんが中学生の子どもを連れて、自転車で駆けつけてくれたことです。

その1年ほど前に、その人からエアコンを買ったんです。エアコンの室外機というのはふつう地面に据え付けますよね。それをその人が、洪水で道が塞がっているのどこをどう通ってきたのか、堤防が切れて30分もしないで来てくれて、室外機を外して水に浸からないように上げてくれたんですよ。そのほかにもいろいろ手伝ってくれて。

でも後から聞いた話だと、帰り道で子どもが流されそうになったと言うんです。旧小貝川の沖須橋が渡れないくらい水がすごい勢いで流れていて、でも自転車で何とかかまって助かったと。そうまでして来てくれたんですね。「自助」「共助」が大事だと言われますが、それをしみじみ実感した出来事でした。

小貝川の左岸側に
浸水が広がっている



この写真も植竹さん所蔵。
龍ヶ崎市の歴史民俗資料館にも展示されている。
道路もほとんど冠水しているようすがわかる

大量に出たゴミ、家財を元に戻す作業、家の修繕に苦労

2階に物を上げて避難させたとはいえ、物置にあったものは泥水に浸かって、ゴミとして相当処分することになりました。また、当時車が3台あって、1台は弟がちょうど旅行に出て使っていて、1台は洪水のなかを走って対岸に避難させたものの、残り1台は結局ダメになってしまいました。

どこの家でもゴミは大量で、何台ものリヤカーやトラックで運んだのですが、どうしようもないイライラした気持ちを、回収車にぶつける人もいたと聞きます。流されてきたゴミの収集には、重機を入れなくては片づけられないところもありました。

それに、2階に上げた物を元に戻すのは、ひと月でも足りませんでしたね。また、家の壁やトイレ、風呂、畳、床などが結局ダメになって修繕が必要でしたし、この時の被災がのちのちまで後を引きました。そう思うと、やはり洪水はもうコリゴリ、と思いますね。

逆に、心が温まる出来事も

でもうれしかったのは、毎日のように知人や友人がお見舞いや掃除の手伝いに来てくれたことです。弟の職場の人も、ポリ缶に7～8本分の水を運んできてくれました。その水で、初めてお風呂に入ることができました。自分の家も浸水しているのに、うちが決壊口に近いかとお見舞いに来てくれた親戚や知人もいましたし、学校卒業以来会っていなかった友人たちも野菜を持ってきて訪ねてきてくれたのです。今思い返しても、心が温まる出来事でしたね。

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



最初の3日間は、「自分の身は、自分で守る」

別に習ったわけではなかったんですけど、あの洪水の時、まず3～4日は助けには来てもらえないだろうと、私たちは直感的に思っていました。

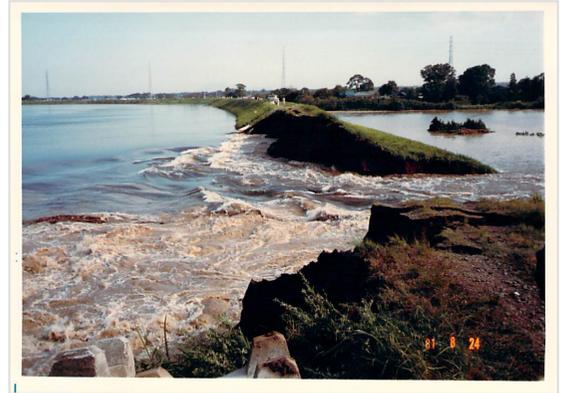
そこで、まず風呂桶をきれいに洗って水を溜め、バケツ、やかん、たらいにも汲んでおきました。

それから、電気が来ているうちに電気釜でごはんを炊いて、いたまないように梅干しを入れた塩つけむすびを作りました。確か2日間くらいは、それを食べていたと思います。

流されてきた川のゴミが庭の中に入らないように、腰まで水に浸かりながら、浸水しているうちに押し流す作業を父とやっていたので拭いたり洗ったりもできました。

そういうところは、うまくやれたなあと思います。

今もよく、「最初の3日間は自助努力だ」って言いますが、とっさに水を汲んでおこう、電気が来なくなる前に、ごはんを炊いておこうと判断して実行したので、決壊直後は救援の食べ物や水に頼らずに済みました。



決壊した堤防から高須町に向かって濁流が流出

小貝川決壊で被災した時の体験と教訓を伝えたい

この時の体験を決壊から20年ほど後に、母校でもある北文間小学校の先生に頼まれて、3年生の2クラスに話したことがあります。うちの娘もその中にいたんですが、「昭和56年にここが決壊して、小学校も潜っちゃって、ひどい被害だったんだよ。ここはそういうところだから気をつけなさい」と。

当時はまだ、豚を飼っているところがあったので、舟に豚を乗せて避難させたんですね。そういう写真を引き伸ばして子どもに見せると、「うわあ、豚乗せてる」なんて言って、実感がわくみたいです。

また、私は河川関係の仕事やPTA活動に携わっていた関係で、河川愛護関連のイベントの時などにも決壊の話をする機会がよくありました。昭和56年に決壊した場所には今でも決壊の碑が建っているのですが、ここに子どもたちにポピーやコスモスの種を蒔いてもらって花畑をつくる「花いっぱい運動」という活動があったんです。夏には保護者も交えて草取りをしてもらったのですが、そうした機会に「ここは昔決壊した場所なんだよ」というのを、よく話して聞かせましたね。こうして当時のことや教訓を伝えていくというのを、10数年続けていました。

そのほかにも、現在の職場での出前講座などで、この時の決壊のこと、自助が大事なんだという話をすることもありました。

過去に大きな洪水があった地域に住んでいるので、洪水体験や教訓を伝える教育も必要なのではないかと思うのですが、今では学校でもなかなか、こういう活動ができなくなっているのが残念です。

むかしは地域のことを知っていたし、伝えていた

私たちの世代は、旧小貝川や小貝川で泳いでいたし、地形を体で知る体験をしましたが、今ではそういう教育はなかなか難しいですね。伝えていきたい思いはあるのですが。

私の家は、最初平屋でした。家を建てた時、祖母が私の母に、はしごで2階に上がる練習をさせたと聞きました。昭和10年の決壊の時は決壊口が家の真後ろだったため、すぐ水が来たとのことでした。祖母は当時4歳の私の父を負って逃げた経験があるので「2階がないと水が来たら逃げられない、その時は屋根に上がれ」と教えたそうです。

また、昔は1mくらい土を盛ってから蔵を建てて、米や農機具を備蓄したり、家の軒先に舟を縛り付けている家が何軒もありました。今ではあまり見られなくなりましたが、そうした取り組みを、子どもの頃から何気なく見て、知っていたというのはありますね。

今年も来ます！
大雨・台風シーズン

洪水に備える！ みんなで守る利根川下流



過去の教訓に学び、備え、 自助努力をしてほしい

昭和56年の小貝川決壊を振り返ると、車を洪水の流れに向かって走らせ対岸に避難させたことや、避難せず家の中の片付けを行ったことが、結果的には被害を少なくしたのではないかと感じます。

しかし一方で、この時取った行動は、非常に危険な行動でもあったと思います。あの時は、決壊した場所から判断して(本家の伯父が決壊直後、現場に確認しに行き、情報を知らせてくれたため)水は旧小貝川沿いに流れるであろうと想定し、小貝川の土手に向かって車を走らせればまだ間に合うし、すぐ戻って片づけ作業ができるだろうと判断しました。私たちは、昭和10年の洪水とは地形が大きく変わっているから(旧小貝川の土手の土を小貝川に運んだため、旧小貝川は堤防がなくなっていた)水の高さが床上になってもたいしたことはないだろうと判断したわけですが、そういった事を瞬間的に家族間で話し合い実行したからこそ、できたのではないかと思います。

それでも夜が明けてきた時には、床上まで濁流が押し寄せ、水の中を歩いて避難できる状況ではなく、大変心細い気持ちで親子3人、2階に上がりラジオからの情報を頼りに外を眺めていました。

洪水ハザードマップや過去の洪水などを基にいざという時のために、自分の住んでいるところはどのくらいの水が来るのか、地形的に判断してどの方向から水がくるのだろうか、どこを通過して、どこへ避難すべきかなどを家族間で話し合うとよいと思います。特に、子どもたちや高齢者などは、いち早く避難しなくてはなりません。その時、常備薬や必要最小限の物を持ち、落ち着いて安全に避難できるよう常日頃から意識してほしいと思います。



龍ヶ崎市の人口は8万人。過去の教訓を踏まえ被害想定をシミュレーションし、防災対策を実施しています。しかし、「想定外」という言葉があるように、被災状況によっては備蓄品など不足する場合もあるかと思います。したがって、「自助」が重要になります。

ですから水や食べ物、子どものミルクなどの必需品は、余裕を持って買い置きし、なくなる前に買い足すようにするといと思います。

また、地域の歴史に目を向けるのも「自助」のひとつだと思います。たとえば「須藤堀」、「長沖」、「川原代(かわらしる)」、我が家も「高須」にあります。こういった水や川に関わる地名や「さんずい」「さんづくり」の偏がつく漢字の地名は、むかし川だった場所が多いのです。これは、過去に水に関する被害があったことを忘れないように、後世に残し伝えたいとの思いで、このような地名を付けたのではないのでしょうか。

また、日本全国で異常気象による記録的な大雨が降り、洪水被害が発生している状況からすると、決壊しないとは限らないのです。

過去の災害を知り、教訓に学び、備える自助努力が、いざという時に自分を守ることに直結します。これを読んでくださっている皆さんにも、ぜひ意識していただきたいと思います。